

戦争責任

多摩区支部 村山 矩子（子）

戦没者 村山 徳栄

戦没地 ガダルカナル島

昭和二十年八月十五日、真つ青に晴れ渡った空の下、長く暗かった戦争は終わった。私は疎開先の群馬県の前橋市で終戦を迎えた。今日からは、毎日鳴り響く警戒警報のサイレンも、雲の上のB29の爆音も、夜の薄暗い生活もなくなるのだと思うと、何ともいえぬ解放感が全身をよぎった。十日前の五日に前橋市はB29の爆撃で全焼し、翌六日に広島に原爆が落ちた。

まだ火の熱さでくすぶる焼跡に、茫然とたちすくむ私達家族（祖父母、母）に神の手のように迎えに来てくれたおじいさんがいた。道路一つと、風の向きで類焼をまぬがれた祖父の同郷の納豆屋さんだった。昔、祖父に恩になったからというのだ。この時程、日頃の行いの大切さと人の情のあり難さを感じた事はない。

通学していた家の前の女学校では、上級生達がアメリカへ飛ばす風船爆弾の風船を体育館で作っていたので爆撃の標的にされ、我が家同様、大きな校舎は跡形もなく焼け落ち、焼土と化し、授業は勿論出来なく、十日後終戦を迎えたわけである。本土空襲が始まる前までは、毎日庭の手入に来てくれるお百姓さんが、一年中色々な物を作ってくれていたもので、夏になればとうもろこ

し、大きな杏子の木からは、毎朝大きな笹に一杯の杏子が取れ、秋には子供の私でも手のとどく所に「百匁の甘」の柿が色づいて、小学生の空腹を満たしてくるには充分だった。

その庭も一夜にして焼土と化し、大きな八重桜の木も、桃の木も、りんごの木も、何一つ跡形もなく灰になってしまいました。根まで熱の為に燃えてしまったのか、その後、何年経ってもそこから木は生えて来なかった。

父の戦死の公報を受けたのは、遺骨迎え盛んな昭和十八年の初めの頃だった、戦死したという実感が家中湧いて来ないのも、毎日ラジオから流れてくる戦況の激しさで、悲しがつている余裕がなかったというのが本当の所かも知れない。

その頃私達小学生は、学校の授業などはせず、駅から戦死者のお宅までの道の両側で、日の丸の小旗を振って遺骨迎えをするのが毎日の日課だった。父の遺骨迎えの日も、それにたがわず、前橋市全小学校の一年生から六年生までが、駅から家までの道路の両側をうめつくして迎えてくれた。私達親戚一同は、前橋市のバスを借り切り、速度は少し落としてはいたが家路に着いた。長い間立って待っていてくれた友人達に、子供心にも申し訳ないと思ったのを今でも、はっきりと憶えている。

私は公報の届く少し前にきれいな小川の河畔に置かれた、風にページがなびいている本の夢をはつきりと見ている。そしてその頃、父の実家の酒倉の窓に大きな火の玉が南の空から入って行ったのを村人が見たという話を聞いているので、もう父はとづくに六千キロの海を一瞬にして渡り、内地の私達家族のもとへ帰ってきているのだと信じているので、私にとっては、こんなにも

軽い遺骨箱も、仰々しい遺骨迎えもあまり意味あるものではなかった。

その後も市では国民の戦意高揚の為、前橋一大きな会館で市葬を挙行したり、当時国はこのような行事を惜しまなかった。

世界各国のトップが、自国の国民の為、国益と称して、領土の拡大を目指す、そしてその結果話し合いがつかず、戦争になり、国民を消耗品の如き考えで戦地に送り込む、人の命の大切さ等という事は、戦争になると全く忘れ去られてしまう。これは戦死者の九割が、一九四四年から敗戦までの一年半にしているという事実でも明らかだ。

勝ち目のない終戦間際、上層部の無謀な作戦で、失われなくともよい幾万もの若い命の「日本が生まれ変わる為に、俺たちは先駆けて死ぬ」と特攻隊、回天等がうまれた。「散る桜、残る桜も散る桜」私は死んでいった人間が一番可愛そうで、生きていれば好きな事ができるのだから。自分の境遇をひきずって、自分を可愛そうがるのはつまらない事だと思う。

「兵隊になんかいかなければいいじゃない」私が戦争体験の語り部で行った、小学校六年生の男の子が云った。拒否すると非国民ということで、刑務所に入れられるしか当時は道がなかった事を説明しても、男の子達はどうしても納得できないという眼指しだった。

私達には、悲しい過去を変える事は出来ないが、二度と繰り返さない為の努力は出来る。平和の原点は、他人の痛みをわかる事、そうすれば争いはなくなり、世界中が平和になる。戦争が地球上からなくなる事を願い私のペンをおきます。「人の命は地球より重い」のだから